

賀川豊彦の経済思想

阿 部 秀 二 郎

はじめに

山折（2009）によれば、賀川豊彦は戦後徹底的に知識人から排除されてきた。その文脈は次である。キリスト教信者としての内村鑑三と賀川豊彦とを比べた場合、前者は知識人、エリートに受け入れられたのに対して、後者は大衆と与する者であった。さらに大衆と与する者であるからこそ第二次世界大戦に対して否定的な態度を貫きえなかった。（30頁）

内村鑑三が知識人に受け入れられた事情については、大塚久雄が内村鑑三の弟子であったこと、大塚史学の存在があることから理解される¹⁾。

一方、賀川豊彦が大衆に与しようとしたことは、賀川自身の科学的性向、それも踏まえたキリスト者としての貧民窟での生活、その後の組合運動との関わりから想像に難くない。したがって大きな問題となるのは賀川豊彦の思想がなぜ知識人、エリートに受け入れられなかったのかという問題である。

いくつかの理由が指摘できる。戦争への態度、神秘主義、人種差別問題などのようなキリスト者としての賀川の態度である。特に差別問題については、労働経済学者の隅谷（1995）によって1965年以降賀川豊彦の冷遇ぶりが指摘されているし、関連する書も出版されている²⁾。本論文ではその評価には立ち入るものではない。

しかし鈴木（2006）が指摘するように、「体を張って時代と対立した」（i頁）人物という点で、両者は異ならないはずであり、その思想に光がもっと与えられても良いはずである。そこで次に問題となるのは、キリスト者としてではなく思想家としての問題である。

本論文では、賀川豊彦の思想について紹介を行うとともに分析を行うことで、問題への暫定的な回答を模索する。Iで提示するように、賀川豊彦の大きな思想の部分としての経済思想に焦点を絞って分析を行うこととする。最終的に賀川豊彦の経済思想について一定の評価を与える。

本論文の論理は次のように展開する。

1) さらに、古川（2006）では大塚久雄と内村鑑三とが、聖書的に理解できない当時の社会状況と格闘せざるを得ない状況にあり、両名ともにその状況において格闘して行く中で、大塚史学が聖書信仰に依存しない方法で確立されていったことが指摘されている。

したがって古川の論理にしたがえば、社会科学を確立した大塚史学に存在する異端的な要素がなければ、大塚史学はどの程度まで知識人に受け入れられるものとなったのかという疑問が生ずる。

2) キリスト新聞社（1991）

まず、Ⅰにおいて、賀川豊彦の経済思想を分析対象にする可能性について説明する。賀川豊彦は社会運動、労働運動の実践者であり、思想家であるが、経済学者ではない。しかし経済事象に関する分析・記述は展開されているのであって、賀川豊彦の経済思想として分析する可能性は存在することについて、説明する。

次に、Ⅱにおいて、賀川豊彦の経済思想の要点について、「貧民真理の研究」(1915)、「主観経済の原理」(1920)を中心に紐解くことで分析を試みる³⁾。

最後に、Ⅲにおいて、Ⅱから抽出された賀川豊彦の経済思想の要点が彼の資本主義経済思想とどのような関連を有するのかについて明らかにし、資本主義批判から第三の道へという賀川の論理を明確にする。

Ⅰ 経済思想と社会思想

経済学は、それを生み出す人間または人間が属する集団の知的前提と知的関心に基づいて生み出されるものである。そして知的前提と知的関心はそれを生み出す人間または人間が属する集団の背景に影響を受けるものである。経済学に関して抱く意味内容が、時代や地域によって異なって解釈されたり、逆に異なる経済的説明が異なる時代や地域において同様に解釈されることがあるために、経済学または経済的説明が展開された背景に立ち入ることにより正確な把握に努めることが経済思想の一つの役割と言えるかもしれない。

塩沢(2004)が『経済思想』において、経済学のフロンティアとして新たな経済学的試みを紹介するうえで指摘するように(ii頁)、経済思想の歴史は経済学が新たに生み出される場合の拠り所として適切なものであるために、適切な過程を経て研究される必要がある。

適切な過程とは、経済学を生み出した人間または人間が属する集団の知的前提や知的関心について、その人間または人間が属する集団の背景である時代的文脈や空間的文脈⁴⁾を可能な限り客観的に分析することである。時代的文脈や空間的文脈を抽出する作業において必然「社会」が分析の対象になる。

本論文では賀川豊彦を扱うことから、賀川豊彦の「思想」を扱うことになるが、同じ思想であっても、「経済思想」と「社会思想」とではニュアンスが異なるとされる。まずそれらのニュ

3) 1936年のアメリカでの講演をまとめた *Brotherhood Economics* (『友愛の政治経済学』)では宗教色が強いが、他方で1915年以降1920年までの経済思想に関連する論文では哲学・科学的な色彩が強い。それらの論文の内容が *Brotherhood Economics* の下地になっていると筆者は解釈する。

4) 時代的文脈の一例を挙げると、産業革命とスミスの関係、フランス革命とワルラスやドイツ歴史学派との関係、世界恐慌とケインズ、ハイエク、新自由主義との関係といった、時代的歴史的な影響を指摘できるだろう。空間的文脈は時代的文脈に内包される部分もあるかもしれないが、一例を挙げると、スコットランド啓蒙、歴史学派、オーストリア学派、ケンブリッジ学派、シカゴ学派といった地理的空間的な影響を指摘できるだろう。

アンスについて把握したうえで、賀川豊彦の経済思想と表現する可能性を論じる。

小柳（2003）の「第1章 社会思想史の方法」を理解することから始める。小柳は社会思想についての研究の特徴を下の七類型に分類する。

第一類型：第二次大戦以前の社会主義思想

第二類型：歴史的人物が社会全体に対して抱く根本的観念

第三類型：社会思想を解放思想と見る立場

第四類型：第三類型への批判としての、「支配階級の現実擁護の思想と、被支配階級の異端的・批判的変革ないし解放の思想を、ともども考慮する立場」（9頁）

第五類型：社会変革と結合するときに社会思想が生まれ、研究対象になると考える立場

第六類型：第四・第五類型を「対局化して乗り越え」ようとする」立場

第七類型：様々な思想を含み、それを超える一般的思想と考える立場

より大きく四つの類型にまとめることが可能である。第一類型、第二類型、第六類型、第七類型である。第六類型は、第三類型から第五類型までの立場を包摂していると指摘できるからである。さらに小柳が挙げる、第一類型の社会主義思想は坂田（1957）も指摘するように、戦前までは社会思想のトレンドとなっていたが、この類型の代表的著作の出版年は1925年⁵⁾であって、その後の社会思想のテーマは変化したと指摘できる。

したがって、結果的には三つの類型を提示することになる。自身の社会思想を彫琢する目的で過去の思想家を探求した河合榮次郎を代表者とする第二類型、「社会生活の主体としての人間（＝人間開放思想の展開）を重視する思想史の叙述」と「社会組織ないし体制（＝社会体制思想の展開）を重視する叙述」に二極化する第六類型、包括的思想としての第七類型である。

ここで本論文が焦点を当てるのは、第二類型に提示されている河合榮次郎である⁶⁾。彼は『社会思想史研究』の序文で次のように、研究の目的と方法を提示する。

「……官を辞したる時、痛切に感じたことは、自己の目を以て社会を視、自己の信念を以て社会に臨むべく、独自の思想を作らんことであつた。此の希望は頭を回して、先人の踏みたる衝を辿らしむるに至つた。先人の社会思想はその全思想體系に於て如何なる地位を占むるか、彼は如何にしてかくの如き社会思想に到達したるか、彼の逢着せし難問は果たして何なりしか、如何なる點に於て後人の改訂を必要となしたるか、すべて之等の問題を掲げ、先師の門を敲くの心を以て、先人の跡を追（二転之繞）うたのであつた。」（河合（1949）一頁）

5) 波多野鼎『社会思想史』（1925年）。さらに坂田（1957）は小泉信三『近世社会思想史大要』（1926年）も例示する（131頁）。なお坂田が目指す社会思想は小泉が分類する第七類型に近いものである。

6) 小柳の目的は、第六類型で指摘される、人間解放と社会体制とに分断された社会思想とのバランス化、「社会思想」と「歴史」とのバランス化を通して、あるべき社会思想の方法を提示することにある。評価を下すには筆者の知識と能力が不足している。

河合は大学入学後に得た学問との出会い、さらに内村鑑三の著書との出会い⁷⁾の中で労働問題に関わって生きていきたいという希望を有するようになった(河合(1935)三六九頁)。その後農商務省に入省し、社会政策に携わるも、省庁の保守的で労働者の立場に立つとは思えない対応に対して「根本的な思想」を求め、職を辞すことにしたのである。

この「根本的な思想」の追跡は河合に「思想」ではなく「思想史」への歩みを進ませることになる。

「社会学徒の中には、單に思想にのみ興味を持つものと、その思想を産んだ人そのものに興味を持つものがある。私の如きは後者の部類に属する。……人に關心を持たない人の多くは、自己の課題を始めより特定して、その課題に対する解答を諸々の人より探らんとする。然しいかなる課題を持つべきかを最先の課題とするものは、人に關心を持たざるをえない。蓋し先人の抱いた課題を探ることは、自己が何を課題とすべきかに貴重なる示唆を與へるからである。私は多くの人が始めより自己の課題を特定してゐるのを見て、尠からず不安を感じざるをえない。何故なればその課題は自己の主観的な偶然性により與へられたか、或は自己ならざる周囲より流行的に與へられたに過ぎないものが多いからである。」(河合(1946)三～四頁)

そして河合は、処女作である『社論思想史研究』において、経済的自由主義がスミス、ベンサムを通して利己的な自由主義として拡充する一方で、利己的な自由主義はそれと対立的な社会主義的で理想的な全体主義的思想を生み出してくることを抽出する。むき出しの自由主義に対して政府の介入を要求する社会民主主義的な流れである。

特に本論文との関係では、スミスについての河合の把握を分析する。結論から言えば、現在においては経済思想と称してよいものである。河合にとってのスミスは、出発点においては経済学者ではなく人類文化史学者を目指していた存在になる。河合はスミスの『国富論』を彼の道德哲学体系の中に的確に位置づけ、自然神学、倫理学、法学、経済学という順序を追ってスミス体系を説明していく。さらにそのようなスミス体系は当時の時代的空間的事情によって醸成されたものであることを提示する。そしてスミス経済学の貢献として、市民中心の経済学(「政治色彩を去ったと云うこと」と、人間性からの科学的経済学(「経済学を科学としたと云うこと」(河合(1949)三一頁))としたことを提示する。

この河合のスミス経済思想において、社会思想と関連させる部分があるとすれば、後のトーマス・ヒル・グリーンへと結実する「理想主義、團體主義」(河合(1949)三五二頁)との関係が深い。

社会民主主義的な状況を支える「理想主義、團體主義」は、スミス以降のベンサム、ミルを

7) 変化に伴う対応の必要性を主張する際に、対応が依存する思想の重要性を説く際に、河合のキリスト教に関する教養が現れている。「新しき酒は舊き革袋に盛ることは出来ない。」(マタイによる福音書第九章の第17節)(河合(1935)三八一頁)

通じて結実する過程を通じて生じたのであり、スミスはその過程の出発点であり、自然科学的な要素の科学主義と同時に自然神学という理想主義をも内包し、また利己主義を重視する個人主義と同時に市民社会を前提とする団体主義をも内包していることまで河合は分析する。

河合はこうして自らの経験に基づく、社会政策への関心から、過去の思想家を研究する中で、「根本的な思想」に近づくことになった。この面のみを取り上げれば社会思想史の「絶対主義的アプローチ」と理解することができる。しかし河合のアプローチには、上に指摘したように当時の時代状況をも考慮している点において「相対主義的アプローチ」も含まれていると指摘できる。

したがって、現在の多くの経済思想史家が行う作業と異なるのは、二つである。対象が経済事象を観察する経済学や経済思想ではない点。「相対主義的アプローチ」への配慮がやや不足している点⁸⁾。

この二つの点のうち、後者については河合の歴史的方法論における先見性を評価することになる一方で、前者についてはむしろ問題があるのではないかと考える。河合については社会思想史家とはいえ、経済思想史家とは呼ばれない。しかし河合がスミスの社会思想を分析する際に「スミスの経済思想」という節を設定しているように、スミスが経済事象または当時の経済事象と関わる人間や社会について分析を行う経済学者としての経済学または経済思想を分析対象に含めていることに注意しなければならない⁹⁾。

河合は経済思想と社会思想とを分類化してはいないが、スミスの分析において経済思想の土台としての社会思想を読み込もうとしている。したがって経済思想は社会思想に包摂されていると考えて差し支えないだろう。しかしトーマス・グリーン・ヒルなどについて社会思想を模索する場合には、経済思想は含まれない¹⁰⁾。

小柳の分類化に戻れば、河合の社会思想はその方法論から分析すれば、「経済思想や他の思想を含み、それを超える思想」をスミスに見出そうとしている点から、第七類型にも含むことが可能ではないかと指摘できる。

本論文では、この河合の社会思想史の考え方に倣い、大きな思想においては社会思想または社会哲学を土台に持ちながらも、経済事象を分析した思想家として賀川豊彦を分析するものであり、彼の思想を社会思想としての前段階の経済思想として分析するものとする。

8) 例えば、スミスやベンサムやミルの時代的背景をより具体的に抽出するためには、河合が同時代人（例えばヒュームやリカードウやコールリッジなど）も取り扱うなどの配慮が好ましいことになる。しかし石井（1992）が指摘するように、「絶対主義的アプローチ」と「相対主義的アプローチ」の相互補完的アプローチは1990年代初頭以降において一般的になるのであり時代的な制約が大きい（3-8頁）。

9) 河合は経済学と社会思想との違いを、それを分析する者の「価値判断」に求める。（河合（1946）二頁）

10) ベンサムの場合には、その経済思想がやはり社会思想と連動するものとして認識されている。

II 賀川豊彦の経済思想

賀川豊彦の経済学者としてのそして経済思想家としての研究は、松野尾（2008）によると非常に少ない（73頁）。松野尾は協同組合と関連付けて経済思想を分析し、隅谷（1995）は労働経済学者としての立場から、賀川豊彦を分析している。そして下の隅谷の評価が強力である。

「……かれの経済学は、経験科学としての経済学の枠をとび出してしまっていた。資本主義経済の病根を批判することはできたが、分析することはできなかった。そもそも、かれの「主観経済学」は経済学ではなく、一種の経済哲学だったのである。それを経済学への自己流の解釈から、あて経済学として提示しようとしたところに誤りがあったのである。経済哲学として、それなりに展開すれば、その意味はもっと大きかったのではなからうか。」（隅谷（1995）40頁）

隅谷が指摘する「資本主義経済の病根を批判する」ことがなぜ資本主義経済を分析せずに行い得たのだろうか？賀川の指摘する「主観経済学」とは資本主義経済の分析なしになされたものであるのだろうか？これらの点を明確にするために、賀川が経済思想に入っていった過程から分析する。

1. 『貧民心理の研究』

賀川の経済的な知識の吸収時期については、すでに神学校入学前にマルクス主義関係の書を読んできたこと、神学校ではクロポトキンや福田徳三の著書を読んでいたことから、葺合新川の貧民窟に入る前であったと推測できる¹¹⁾。

賀川が貧民窟に入ったのが、1909年であり、その後『貧民心理の研究』に着手したとされるのが、1912年である¹²⁾。『貧民心理の研究』冒頭部分で、賀川は唯物史観に対して疑問を呈する。

「唯物的歴史観が、万象の精神生活を凡てパンの問題で解決が出来ると思つたのは二、三十年前からの事であるが、私は、貧民窟の哀史を一日一日繙くと共に何だか……マルクスの所説が「ほんとぢやないのか知ら」と釣込まれ相なこともある。然しました、人間の精神生活は実に高貴なもので、……如何な貧民と云へども、根底に於てパンと寒気に圧迫されて居ても、また精神生活の一種の表面張力によつて、水が軍艦を浮かばす様な、不可思議な現象を演じて居るのである。」（賀川（1915）5頁）

賀川が唯物史観に疑問を呈する理由は次である。マルクスの唯物史観において資本主義崩壊の主役を担うべき搾取された労働者階級（賀川にしてみればより下層な貧民階級）は貧困を原因として革命を起こすのであるから、経済的な貧困を回避できれば問題は消失するはずである

11) シルジェン（2007）44,45,62頁

12) 武藤（1962）561頁

が、賀川の経験はそのような方向には至らない可能性があり、唯物史観は人間の心理的分析が欠落していることが問題である¹³⁾。

賀川の論理は次のようになっている。まず貧民が発生する原理を説明し、貧民の実情を分析する。ここまでの段階で貧民問題と食料の関係の深さを抽出し、食糧生産手段の占有化が貧民を増大する原因であることを指摘する。そしてその状態を回避するために賀川は生産手段占有化の廃棄ではなく、貧民の人格の向上を方法として提示する。その提示の理由の一部は、その後の賀川の論理でうかがい知ることができる。賀川は次に物質的欠乏が心理に与える影響を研究する。住宅問題・立地問題などを指摘した後で、食糧問題へと筆を進める。貧民が貪欲であること、暴食であること、規則正しくない食事習慣のあること、等が指摘される。さらに衣服問題では虚飾心のために身を崩す女性があることも指摘される。さらに景気変動と貧民心理も指摘されており、景気が良くなるからと言って貧民の生活が改善するわけではなく、売買春や博打、姦通などが増加することも分析されている。その他にも様々な面について分析が重ねられる。

最後に賀川は貧民の群集心理を分析し、次のようにまとめる。

「革命に於て貧民が暴力の中心であると云ふことは到底拒めない。……日本における兇徒聚集罪に問はれたものは日露前十年間に於て合計百五十四人であるが稍資産あるものは三十四人で、資産あるものが八人、資産なきものは八十人、赤貧者は三十二人、全く無学なるものが八十七人あると云ふことは特に注意に値することである。……近來に於てはよく民衆運動が起るが、それが愈々暴動或は騒擾と変化する場合に於てその中心となって働くものは多く下層のものである……」(賀川(1915) 267頁)

したがって、賀川は貧民に物質的な支援を与えるだけでなく、人格の向上が試みられなければ到底貧民は貧民窟から脱出することはなく、また貧民が暴動などの中心的な存在としてあり続ける可能性を、貧民心理の研究から論じた。生産力向上が進む中でもたらされる窮乏化が労働者を導き資本主義を終焉させ、社会主義を実現することができたとしても、貧民の存在は消失しないと指摘することもできるだろう。

2. 『主観経済の原理』

賀川が『主観経済の原理』(1920年)以前に、主観経済学を主張する「精神運動と社会運動」でその経済学が間違った方向へ進んでいることを指摘している経済学者は、マルクス、マルサスである¹⁴⁾。

13) この賀川の思考の原点を『貧民心理の研究』に多く登場するゾンバルトに求める可能性がある。ゾンバルトがマルクスに対して批判を行っている論文「マルクスと社会主義」(1894)及び『近代資本主義論』(1902)における、「主観経済学」という用語、心理学との関係について、賀川が影響を受けている可能性である。後者の示唆は、田村(1996)から受けた。

マルクスについては資本主義の終焉がなかなか訪れないこと、マルサスの場合には統計データに基づき結婚率と出生率が減退している事実が人口法則とは一致しないことが指摘されている。(賀川 (1919) 387-8 頁)

このように、傾向的な法則が必ずしも事象の結論と一致しないことは自然科学でも起きることである。そしてこの不一致の原因を、即座に経済学の「客観性」に求め、その対策として「主観性」を提示することは容易な推論ではない。賀川が何を見ていたのかは次の叙述から推測を行える。

「凡ての科学は今や主観の係数を加へて居る。幾何学や物理学にまで主観幾何学や、相対律が侵入し居る時代である、規範科学の経済学が主観化されるのは当然だと私は思ふ。」(賀川 (1919) 387 頁)

この引用において、まず本章冒頭に引用した隅谷の指摘を裏付ける賀川自身の認識を獲得できる。つまり隅谷が表現したように、賀川は経済学を経験科学としてではなく、規範科学として見ているという点である。そして経験科学として経済学を記述する方法を実践している経済学者にとって、賀川の姿勢はその方法を「飛び越えている」。しかし賀川はその批判に対して、その経済学の方法は古くなるのであり、彼の求める経済学は未来の経済学になるという宣言を行っている。『主観経済の原理』の中の序から指摘できる。

「主観経済学はどこが究極の原理であるかと云ふことを必ずしも教へませぬ。それは成長を基礎として居ります。それで人類の成長と共に価値に変動がある、今日の資本主義の経済組織やその上に築かれて居る幾百巻の経済学は全く無用なものになると説いて居るのが私の唯一の心理であるかもしれませぬ。」(賀川 (1920b) 177 頁)

先に引用した箇所とこの引用した箇所から推測できることは、次の点である。経済学も他の科学同様に一つの科学である。他の科学には主観的な要素が加わることで、客観的な記述科学から脱却しようとしているのと同様に、経済学にも主観的な要素が加わることで既存の客観的な経済学から脱却することになる。その推測を裏付ける他の証拠として次の記述を挙げよう。

「……ユークリッド幾何学に対するロバチェフスキーや、リーマンの新幾何学の関係が線と角の時間的发展の関係である様に、主観経済学と今日までの唯物経済学の関係は富の時間的发展の関係であります。」(賀川 (1920b) 178 頁)

賀川が指摘しているロバチェフスキーやリーマンはユークリッド幾何学の限界に挑戦することで、新たな領域である非ユークリッド幾何学を展開した物理学者である。そして非ユークリッド幾何学はユークリッド幾何学から発展的に生じてきたのと同様に、主観経済学も唯物経済学から発展的に生ずるものであると論じている。つまり科学と同様に経済学も進化するという賀

✓ 14) エンゲルスについては、恐慌の要因としての社会心理を賀川が挙げている。(賀川 (1919) 387 頁) この点について賀川がマンチェスター統計学会のジョン・ミルズらの経済学者の考え方についてどこまで知り得たのかは、未検証である。

川の認識である。

3. 「主観」と「進化」

賀川の経済学は「主観」経済学であるが、隅谷によれば、それは「オーストリア学派の主観価値説などとは、何のかかわりもない」（隅谷（1995）40頁）と評されている。その理由として隅谷は賀川の経済学はラスキンからの影響を受けたものであり、さらにマルクスの影響が大きいことを指摘する。しかし、次の賀川の言葉に注意を向ける必要がある。

「私はこの書〈主観経済の原理〉を編むに当つて他人の思想を借りて居りませぬ。たゞもしも私が深く考へさされたものがありますればラスキンの芸術史論であります。ラスキンの経済論は私にはあまりに非科学的で受け取れ無かつたのでありますが、ラスキンの芸術史論は私が唯心論的経済史観を編むに直接の動機を与へたものであります。」

（〈 〉は引用者による。賀川（1920b）177頁）

賀川は唯心論的経済史観について、ラスキンから影響を受けたとし、しかも芸術史論から影響を受けたとしている。したがってラスキンの経済学の著述と一般的に見なされる「芸術経済論」、『この最後の者にも』、『ごまとゆり』ではなく、『建築の七燈』と『ヴェニスの石』とからの影響ということになる。

ラスキンの芸術史論に関する賀川の分析は、『人間苦と人間建築』で次のようにまとめられている。

ラスキンは、『建築の七燈』において、建築物には精神的作用が現れていることを論じることで、建築の鑑賞において人間性の重要性を主張した。さらに『ヴェニスの石』では、歴史的な建築物には時代精神が反映されていることを論じ、ゴシック期の建築物とルネッサンス期との建築物とを比較することにより、ルネッサンス期のヴェニスの市民生活が墮落し、建築も墮落したと指摘した¹⁵⁾。（賀川（1920a）170頁）

賀川にとってラスキンが重要であったのは、芸術作品を通じた人間性の重要性の把握であった。つまり芸術という客体に対して、主体である人間の精神が働きかけていることをラスキンが発見し、社会の繁栄もその背後に存在する人間の精神の問題であることを指摘したことであった。ラスキンにとってのルネッサンス期は賀川にとって近代資本主義とも重なると感じられた。「資本の蓄積と、骨董品の売買と、……偶像が出来る」（168頁）のは、マルクスの言葉を利用すれば物象化であり、賀川は資本主義を物神性が支配する社会であると認識した。そしてマルクスが「社会に於ける生活を決定するものは、人間の精神ではなくして、反つて、この種類の生活が彼の精神を決定するのである。」（賀川（1920b）194頁）と主張し、人間の精神

15) このラスキンの芸術論については、伊藤（2010）、同じく伊藤（2011）に詳しく論じており、賀川の分析を深く理解できる。このような賀川のラスキン芸術史の分析は、カーライルの『衣装の哲学』にも及び（賀川（1920b）194頁）、芸術と同様に衣装がその時代の人間性の表象と把握される。

が物質に依存するものであると主張したのに対して、賀川は人間の主観が社会を規定していることを、ラスキンの芸術史を通じて説明する。

このラスキンの芸術史そして人間の主観を中心に据える考え方を受け容れる場合に、賀川はカントの主観主義の考え方を提示する。

「カントが認識に於ける、客観性を破壊した如く私も価値評価に於ける、客観主義を破壊する。」(賀川 (1920a) 168 頁)

賀川のこのような主観主義についての認識は、賀川によれば時代的な背景を有しているものであった。ショーペンハウアー、ニーチェ、ベルグソン、新カント派など、ヘーゲル哲学崩壊後の哲学の新たな動向が指摘されている。(賀川 (1920b) 179 頁)

これらの哲学者はそれぞれに賀川に影響を与えたものであると思われるが、その中心的な考え方の中で、指摘した主観主義以外に、「進化論」を指摘することができる。賀川は経済学が歴史的アプローチを取らなければならない理由として、対象が自然とは異なる人間であることを提示している。自然は同一的であり反復性があるのに対して、人間はその性質を有しないのである¹⁶⁾。この背景を支えているのが、賀川の進化思想である。

賀川が格闘した進化論は、ダーウィン進化論であり、兩宮 (2003) が仮定するように (133 頁)、無神論的進化論であった。

賀川のダーウィン進化論批判は、ダーウィンという人間、そしてダーウィンに限らず当時の時代の人々の、社会進化の方向に関する問題に、根拠を求めることができる。

賀川は、ダーウィンを主に次の2点で批判する。

物理学者でもあり音響学者でもある無神論者のヘルムホルツの眼球についての論理を批判せずに受け入れること、残酷な生存競争や偶然的な事情が種の保存に繋がるという進化論を展開していること、である。

「ダアウインが、不正確な統計の上に立つたマルサス『人口論』と、ヘルムホルツの形而下の形而上学の闇に迷うて、生物進化の原則を『生存競争』と『盲目的変異』のみに求めた……」(賀川 (1919) 294 頁)

それぞれに対する根拠は次である。

前者については、眼球の不完全性を分析したヘルムホルツの物理学的な業績は素晴らしいとしても、その論理を以て無神論を説く論理には結びつかないこと、後者については、帰納的分析を行うに足る観察が不十分であるのに早急に結論を導き出していること、である。特に後者については、ファーブルが多様で深い観察結果に基づき残酷な生存競争を回避するように種は進化しているという考えを提示していることについて、そしてファーブルが進化の過程に設計者の意思が作用している結論を導出したことが、賀川の進化思想に影響を与えている。(賀川

16) 賀川は左右田喜一郎の『経済哲学の諸問題』の方法論を指摘している。橋本 (2006) によれば、本書では新カント的なものに、ベルグソンの生の哲学が加えられている。(402 頁)

(1919) 296-301 頁)

賀川の生物進化論に関する生物学の歴史的考察はベルグソン以降まで続き、生物学史においても幾何学の歴史とともに、設計者の目的が再発見されていることを指摘する。

「……ベルグソン以後、ロエブ、ピアソンの様な極端な機械論が主張されるにもかゝらず、……超越目的論を聞くと云ふのはどう云ふことだろう。……今ベルグソン以後決定的目的論を高等動物学者間から聞くのは注意すべき問題である。」(賀川 (1919) 317 頁)

Ⅲ. 賀川の資本主義経済思想

賀川思想は、「主観」と「進化」に要点があると指摘したが、この二つの関係について経済思想でどのように扱われているかと言えば、次のようになる。

「文明の初期に於て人間はあまり主観に価値を置か無かつた。……人間の欲望は常に客観界に向いて居た。……その経済学は物の経済学で、心の経済学にはならなかつた。……段々文明の進歩と共に、物より心へと人間が進歩して……心の経済学が発達してきたのであるが、人間社会の細胞分裂が心の経済の発達以上早い為めに、……物質的客観に対する経済学は、今度は社会生活客観に対する経済学として発達することになった。そして、その社会生活に於ける客観の価格を貨幣で計算することになった。」(賀川 (1920b) 181 頁)

主観は人間の進化とともに展開するのであるが、資本主義社会は市場経済で取引される貨幣が中心に展開しているということになる。

次に、富が歴史的初期段階の実物の段階から、貨幣の段階へと歴史的に進化することを分析することにより、賀川は将来貨幣に代替した「信用」が中心に展開する時代になると予想する。

「富と云ふものは、一種の文化思想上の経済的表象であつて、文化の程度が進めば、進む程、その富の標準も進化してくるのである。……発達した社会では、信用で十分富の計量が出来様になつて来た。かうして世界から、貨幣による富の計量が、全く根絶され、その人の信用と、能力に対する認識のみで、経済組織が行はれる様になるであろう……」(賀川 (1919) 398 頁)

富の歴史的変遷同様に、資本の歴史的変遷についても賀川は「資本の智識化、所有権の心理化、社会組織の貨幣的表象化」¹⁷⁾から、最終的には資本を「社会的信用」と定義づける。

この富と資本とに関する歴史的進化の過程をたどる中で、賀川は進化を推進する中心に社会的需要を認識しており、労働者を含む社会全体の需要が資本家の報酬である利潤を生み出して

17) 「資本の智識化」とは、実物的資本から知的生産物へと歴史的に資本の中心が移ってきたことを意味する。「所有権の心理化」とは、知的財産権などの人間的知的心理的展開を意味し、「社会組織の貨幣的表象化」とは、資本家が有する資本としての貨幣は、社会組織の「動的方面」の表象化されたものとなっていることを意味する。(賀川 (1920b) 182-3 頁)

いるのであって、利潤は資本家のみではなく社会全体に帰着するべきであるという論理を展開する。この社会的需要を重要視する論理はしたがって生産要素価格決定の論理と同時に、正当な所有権の問題にまで立ち入ることになる。資本価格については上に示したように社会的需要が影響を与え、「社会」全体への報酬の還元が求められる。また、土地価格に関して、賀川は土地の価格は土地の生産性によって規定されるのではなく、歴史的に進化した社会的需要によって規定されるものであるから、個人の自由にはされるべきものではないという論理になる。

「……土地価格の騰貴なるものは、人類の心理生活の社会的発展によるものであるから、その領有は、心理的また社会的であらねばならぬ。」(賀川 (1920b) 182 頁)

このような心理的側面からの将来的な経済予想を立てた賀川ではあるが、彼以外の経済学者特にマルクス経済学の予想に対して詳細に批判する。

端的にまとめると、マルクス経済学における価値の労働源泉論については正しいし、資本家の利潤追求に関する心理的分析も正しい、そしてそのために資本主義社会が大きな問題を有していることを指摘できたことも正しい、しかし脱出方法をマルクスは提示できなかったという批判である。

賀川の脱出方法は、それらの問題をもたらし心理的状況の改善である。なぜならばマルクスが指摘するように社会主義が実現したとしても、金銭的利潤を追求するという心理的改善が資本家に限定されずに労働者も含めた人間全体に存在しない場合には、支配被支配という関係が再生されることになるからである。(賀川 (1920b) 234 頁)

しかしこの脱出方法について、1919年、1920年の頃はまだ全面的に強力さを有しているわけではないと推測できる。

賀川はマルクス理論に於いて、労働価値説と余剰理論は受け入れるが、恐慌説、革命説、資本蓄積論、利潤逡減論について、それぞれ次の理由に基づいて切り捨てている。恐慌説については、1907年の恐慌を回避できたことなどの経験から楽観的に見ている。革命説については、封建時代との比較において差別が大きくないこと、労働組合の組織化などによって必然的ではないと見ている。資本蓄積論については、資本主義に限定されるものではないと見ている。利潤逡減論については、マルクスの直線的な説明ではなく、社会的に利潤を低減させる力が作用するものであるとしている。(賀川 (1920b) 237-9 頁)

賀川の1920年の『主観主義の原理』では、上に示したように資本主義が貨幣という物によって人間が支配されているという物神性を受け入れてはいるが、ある程度資本主義は様々な経済成長をもたらしながら問題を解決していく可能性もあると、賀川は楽観的に見ているように思える。しかし1937年に出版された *Brotherhood Economics* では、次のように資本主義に対して、1920年の論文の内容を否定するような指摘がなされる。

「……資本主義は、改善された形であっても、恒久的な社会秩序に属するものではない……資本主義は自由競争の原理に基づいており、次のような四つの特徴を持つ。(1) 収奪のシ

ステム。(2) 僅かな人々の集中での資本の蓄積, (3) 資本の集中とともに, 勢力は支配階級に集中する。(4) 無産の低賃金労働者が大半を占め増え続ける。」(賀川 (1937) 32 頁) 楽観的な資本主義への予想が裏切られるようになった原因は, 言うまでもなくアメリカの大恐慌であって, 1920 年の論文で楽観的に処理されていた恐慌であった。¹⁸⁾ さらに忍び寄る戦争の影にも影響を受けていると思われる。その結果としても組合運動の成立が求められる。

「世界の平和を確保する方法はそれら経済問題の解決を通してでなければならない……非搾取と計画的な経済に基づく協同組合運動を拡げ, 国際化してゆく必要がある。私たちがこの運動を国際化することに成功したら, 私たちはやがて世界平和を実現することになるであろう¹⁹⁾。」

資本主義に対するより強力な危機感の表出は, 賀川を資本主義脱出へと向かう主張をより強力に行わせるようになったと指摘できるが, 社会主義を標榜するものではなかった。賀川にとっては, 社会主義であっても協同組合であっても「資本主義的」である場合には失敗に終わるものと考えられた²⁰⁾。物の生産が起点となる「資本主義」では, 進化する需要主体による人間中心の経済システムを構築できないからである。

ヨーロッパではこの時期社会主義経済計算論争が展開され, 資本主義を肯定する研究者にとっても一部の社会主義を肯定する研究者にとっても重要な市場経済に関する, 様々な学問的展開が進んでいる中で²¹⁾, 賀川は市場経済の動的な持続性を追求する論理を追求したと指摘できるのではないかと。そして大恐慌の経験や戦争への足音を聞きつけた賀川にとって, 進化する需要主体が顕現化することについても楽観的ではなくなり, 何らかの教育啓蒙をより強く主張する必要性を感じたと指摘できる²²⁾。

むすび

ケインズが『一般理論』の「長期的期待」で, 資本主義の不安定性の原因として投機を挙げ,

18) 滝川 (2010) も参照。

19) 経済問題とは次である。「人口過剰, 自然資源の欠乏, 国際金融の問題 (例えば, 債務, 国債, 信用など), 貿易政策の摩擦 (例えば, 関税や取引転換など), 運輸政策の問題である。」(賀川 (1937) 149 頁)

20) オーウェンも批判対象とされている。(賀川 (1937) 88-89 頁)

21) 西部 (1996) 参照

22) 賀川は「人々のニーズと力量について無理解な国家社会主義の強制は, 恐らくはさらに悪い形の別の資本主義体制を創り出すにも等しいことになる」(賀川 (1937) 93 頁) と述べることによって, 当時の社会主義に否定的なスタンスであったと指摘できる。また論理的には, ニーズが現れる市場経済について否定的論理を展開しておらず, むしろ制度を肯定的に評価することになる。さらに経済主体が不完全であるという認識を有している点でも, 賀川を新自由主義的な存在に近づけたい誘因に駆られる。しかし主体が自らの過誤から何かを学ぶというよりも主体を啓蒙していく必要があるという点で論理が一貫しなくなる。この背後に『貧民心理の研究』を指摘することができると推測する。

また人間心理の不安定性とを挙げている部分は、ケインズが資本主義経済の根幹に於いて人間の主観的要素が大きな比重を占めていると考えていることを教えてくれる。

本論文で考察した賀川の「主観」を経済学を中心に据えるという方向性は、それらの研究に直接つながるものでは、もちろんない。隅谷が賀川の「主観」概念について、オーストリア学派とは異なるものであると指摘した点も、個別的な主観的要素から市場での価値決定論を分析するというメンガー的な主観価値説とは異なる点で正しい。しかしさらに経済思想の分析にまで進むと間接的な関連を推測させる。賀川が物的経済を批判する際に用いたカント的な「主観」概念が、メンガーが土台とした方法論的個人主義を提供したメンガーの経済学の教師であるラウの経済学に影響を与えているという分析もある（木村（2010）118頁）。そして主意主義に関するカントとケインズとの思想的連関も指摘されている（山崎（1987）395頁）。

そして賀川は主観または需要を経済活動の中心に据えることで、生産財の価値は主観（需要＝消費）によって左右されるというオーストリア的な帰属価値の概念へとつながる要素も存在したが、不完全である。

賀川にはなくメンガーやケインズに存在したのは、経済的な土台または基盤である。メンガーはドイツ官房学、ケインズにはマーシャルのケンブリッジの基盤が存在したのに対して、賀川に存在したのは図書館だけであった。

次に賀川の経済思想の背景に、進化思想を重要な存在として認めることができる。賀川が主観を重視したのも、経済分析を静学的な枠組みで捉えなかったのも、不完全な自然同様に人間も進化していくという設計主義的な目的説が土台に存在したからである。進化経済学のヴェブレンが機械論と目的論との格闘の中から経済学批判を行ったように、賀川も同様な経路をたどる。つまり賀川の経済思想には進化経済学的な要素が存在していると指摘することができる。

ヴェブレンと賀川との違いは、ヴェブレンにはアメリカのプラグマティズムという思想的土台が存在したのに対して、賀川に存在したのは図書館だけであった。

賀川が資本主義経済の病根を分析せずに、指摘したのかどうかについて、回答を与える。

資本主義経済の病根を賀川は「拝金宗」（賀川（1920b）235頁）とする。そして拝金宗の論理を、賀川は次のように説明する。

「凡ての物価が今日では之で計量が出来て居るものだから、人々はこれを集中させ……」（賀川（1920b）188頁）

貨幣は価値尺度手段であり、すべての商品の価値を尺度できるので、人はこれを蓄積するというのが賀川の解釈である。ケインズの「流動性」という定義を認識しているわれわれにとって、賀川の分析は正しくはないが、貨幣そのものに対する人間の心理的特徴づけの問題は認識していると指摘できるだろう。貯蓄が直接投資へと結びつくわけではないという認識、かといって消費が浪費になる可能性の認識、貨幣が死蔵することなく利用されなければ社会が疲弊するという認識など、賀川の経済思想には重要な認識が未整理のまま残されていたと指摘できる。

そして賀川が主観を中心として経済思想を論じる場合、「貨幣」という表象こそ深く分析すべき問題であったが、十分ではないとも指摘できる。

賀川の「主観」と「進化思想」とに光を当てた場合、賀川がマルクスのみではなく、例えばヴェブレンを始めとするアメリカ制度学派、ミーゼスなどの主観主義を強く打ち出すネオ・オーストリア学派、ラスキンの影響を受け倫理的経済学から過剰貯蓄説を展開したJ.A.ホブソンそしてケンブリッジ学派などの経済学文献を、どこかで研究学修する機会があれば、賀川の経済思想は更に彫琢されていったものと思われる。

河合がトーマス・ヒル・グリーン思想へと至る系譜の起点としてスミスを選択したのと同じように、組合運動思想の起点として賀川を選択することができる。その場合河合がスミスの経済思想を社会思想に含めたように、賀川の経済思想を組合運動思想に含むことができる。それはマルクス主義のような資本主義の矛盾を社会主義革命として解決しようとするのではなく、労使の別なく、その中に存在する人々の人格的陶冶に解決の糸口を賀川が求めたということであった。

「資本主義社会で、ごく少数者が独占的に支配し、人間の循環系統に当たる貨幣制度を麻痺させている。この事実をも鋭く感じるのは、筋肉組織である労働階層である。だからといって、もし循環系統を廃止するのが最善と考えて、筋肉組織だけに依存するとすれば、私たちは決して健全な身体を構成することはできないだろう。それゆえ……私たちは経済革命を、社会のどれか一部分にではなく社会の全体に基礎を置くものにせねばならないのである。」(賀川(1937)76頁)

このように賀川の経済思想は独特である。そして経済事象に関する分析も独特である。これは賀川自身が大切に保持した「主観」主義的な要素が影響を与えていると指摘できる。他方で、この「主観主義」と賀川自身が大切にしていた進化論という点で、メンガーからハイエクへとつながる新自由主義を考慮したときに、賀川の論ずる設計的な考え方と対立する部分が存在することになる。そしてこの自由的な要素と設計的な要素との対立が、各種運動を主張する側における賀川の「中途性」の認識と結びついたり、経済学者(社会主義を標榜する側も資本主義を標榜する側も)の側における賀川の不完全性の認識と結びついている可能性を指摘できるだろう。

参考文献

- 雨宮(2003):雨宮栄一『青春の賀川豊彦』(新教出版社,2003年)
キリスト新聞社(1991):『資料集・賀川豊彦全集』と部落差別』(キリスト新聞社,1991年)
古川(2006):古川順一「第5章 大塚久雄—リベラル・プロテスタンティズムとウェーバー—」『経済思想⑩ 日本の経済思想2』(日本経済評論社,2006年)
橋本(2006):橋本努「第10章 左右田喜一郎—真・善・美にならぶ貨幣—」『経済思想⑩ 日本の経済思想2』(日本経済評論社,2006年)
石井(1992):石井信之「I 方法の問題 経済学史の方法」『経済学史—課題と展望—』(経済学史学会編,

- 九州大学出版会, 1992年)
- 伊藤 (2010): 伊藤邦武「ラスキンの藝術経済論(二) <特別寄稿>」『哲学論叢 37』(京都大学大学院文学研究科哲学研究室, 2010年)
- 伊藤 (2011): 伊藤邦武『経済学の哲学—19世紀経済思想とラスキン—』(中公新書, 2011年)
- 賀川 (1915): 賀川豊彦「貧民心理の研究」『賀川豊彦全集第8巻』(キリスト新聞社, 1962年)
- 賀川 (1919): 賀川豊彦「精神運動と社会運動」『賀川豊彦全集第8巻』(キリスト新聞社, 1962年)
- 賀川 (1920a): 賀川豊彦「人間苦と人間建築」『賀川豊彦全集第9巻』(キリスト新聞社, 1964年)
- 賀川 (1920b): 賀川豊彦「主観経済の原理」『賀川豊彦全集第9巻』(キリスト新聞社, 1964年)
- 賀川 (1937): 賀川豊彦『友愛の政治経済学』(加山久夫・石部公男訳, 日本生活協同組合連合会, 2009年)
- 河合 (1935): 河合榮次郎『河合榮治郎選集第二巻』(日本評論社, 1935)
- 河合 (1946): 河合榮治郎『河合榮治郎選集第一巻』(日本評論社, 1946)
- 河合 (1949): 河合榮次郎『河合榮治郎選集第六巻』(日本評論社, 1949)
- 木村 (2010): 木村周市朗「近代原理の形式性とドイツ国家学の実質性」『成城大學経済研究 190』(成城大学, 2010年)
- 小柳 (2003): 小柳公洋『近代と思想』(西日本法規出版(株), 2003年)
- 松野尾(2008): 松野尾裕「賀川豊彦の経済観と協同組合構想」『地域創成研究年報第3号』(愛媛大学, 2008年)
- 武藤 (1962): 武藤富雄「解説(『貧民心理の研究』について)」『賀川豊彦全集第8巻』(キリスト新聞社, 1962年)
- 西部 (1996): 西部忠『市場社会の系譜学—「経済計算論争」をめぐるヴィジョン—』(東洋経済, 1996年)
- 坂田 (1957): 坂田太郎「わが国における教科としての「社会思想史」」『一橋論叢 37(4)』(一橋学会, 1957年)
- シルジェン (2007): ロバート・シルジェン『賀川豊彦』(賀川豊彦記念松沢資料館監訳, 株式会社新教出版社, 2007年)
- 塩沢 (2004): 塩沢由典「第1巻序文」『経済思想①』(日本経済評論社, 2004年)
- 隅谷 (1995): 隅谷三喜男『賀川豊彦』(岩波書店, 同時代ライブラリー, 1995)
- 滝川 (2010): 「サブプライム危機と『友愛の政治経済学』: ケインズ, 賀川, フリードマンの鼎談」『平成21年度貯蓄・金融・経済 研究論文集』((財) ゆうちょ財団, 2010年)
- 鈴木 (2006): 鈴木信雄「第10巻序文」『経済思想⑩ 日本の経済思想 2』(日本経済評論社, 2006年)
- 田村 (1996): 田村信一「近代資本主義論の生成(一)—ゾンバルト『近代資本主義』(初版1902)の意義について—」『北星論集(経) 第33号』(北星学園大学, 1996年)
- 山折 (2009): 山折哲雄「抑圧された賀川思想の回帰」『季刊「あっと」』(太田出版, 2009年4月)
- 山崎 (1987): 山崎弘之「ケインズ『一般理論』における主観主義(三)—G.E. ムーアとの関係を中心として—」『国士館大学政経論叢(61・62)』(国士館大学政経学会, 1987年)

謝辞

賀川豊彦記念松沢資料館館長の加山久夫先生と副館長の杉浦秀典先生に、様々なお話をさせていただいたこと、資料を提供していただいたことについて、お礼申し上げます。

Kagawa's Economic Thought

Shujiro ABE

Abstract

In this paper we consider Kagawa Toyohiko's economic thought. Kagawa was famous as the leader of the cooperative movement and a labor activist, so he is widely recognized as a social thinker. This means that Kagawa is not recognized as an economic thinker. Firstly we define both social thought and economic thought, including economic thought in social thought as appropriate. Secondly we consider a few points concerning Kagawa's economic thought through his writings after his overseas education. Thirdly we consider Kagawa's idea of capitalism and affirm his economic thought.

We conclude that Kagawa's economic thought was based on subjectivism and evolutionary thought. However, these two factors lowered the evaluation of his economic thought.